わたしにとって
リンカーンが意味するもの

アイリーン・マッケビッチ

エイブラハム・リンカーンは、歴史上の英雄の中で、米国が独自に生み出した英雄として際立っている。不毛の辺境での暮らしに甘んじる控えめな両親の間に生まれながら、流星のように華々しく立身を遂げた彼は、まさに人を鼓舞せずにはおかない存在だった。リンカーンはその生涯を通じて自分を磨き、自らを新しくつくり変え続けた。200年を経た現在でさえ、われわれは彼の導きを求めている。実際、われわれはこの第16代大統領を見習うほかないのである。極めて米国的な不屈の野心の持ち主であっただけでなく、常に自分の人間的誠実さを決して曲げまいとする確固たる信念に基づいて、決断を下したリンカーンに。

リンカーンに退屈を感じることは決してない。彼は単純な人物でもあり、複雑な人物でもあった。人足、冗談好き、世捨て人、行動派、そして理想家であった。理解できたと思った途端、つかみどころなく逃げてしまう。リンカーンは分類不可能な人物である。どんなときにも、どんな理由でも頼りになるのがリンカーンなのである。

さまざまな姿を見せるリンカーンは、学者たちに豊富な材料を提供する。彼らはリンカーンの人生の本質やその悲劇的な死のより大きな意味を論じる。人種に対する考え方はどうやってはぐくまれたのか？　奴隷解放について慎重な行動を取ったのはなぜか？　戦場で勝利しなければならないという絶対的要件と、そのために海外からの支持を集める必要性だけを念頭に、彼は行動したのか？　奴隷だった人々に完全な市民権を与えるという考えをいつ受け入れるようになったのか？　彼の再建計画が実現すれば、北部と南部は、奴隷だった人々の全面的な法的平等を確保しながら再統合できたのだろうか？

リンカーンの死後、人種間関係は悲劇的な道筋をたどったが、それを軌道修正できたとすればリンカーンをおいてなかっただろう。しばしば米国史研究の長老と称されるアフリカ系米国人のジョン・ホープ・フランクリンは述べている。「すべての米国大統領の中で、リンカーンだけが国民の運命を危惧して、寝ずに夜を明かしていた」

今日ではリンカーンはほとんどの米国人から尊敬を集めているが、生存中は、あらゆるときにあらゆる理由で頼られるような存在とはとうてい言えなかった。南部人と奴隷制廃止論者の多くは彼を嫌っていた。元奴隷で、後に奴隷制廃止論を訴える作家、編集者、政治改革者となった（そして英国で最も尊敬されていた）フレデリック・ダグラスは、奴隷解放に向けて迅速に行動しなかったとしてリンカーンを非難した。ダグラスはリンカーンが、南部の反乱には加わらないものの奴隷制を維持していた境界州に気を遣い過ぎる、と感じていた。後になってようやく、ダグラスはリンカーンの政治的手腕を認めた。そしてこの大統領が、米国人を奴隷制廃止に向かわせるスピードと範囲をよく心得た、見事なまでに実際的な政治家である、と理解するに至ったのである。

学ぶことに常に意欲的であったリンカーンは、率直に意見を言う人たちをホワイトハウスに招いた。彼らの誠実さを尊敬していた。その中のひとりがダグラスであった。このほか、アンナ・ディキンソンがいた。彼女は奴隷制廃止を主張するクエーカー教徒の運動家で、女性の

法令によって創設された「エイブラハム・リンカーン生誕 200 年記念委員会」は、第 16 代米国大統領の生涯と遺産を称えるとともに、全米、全世界でその考え、理想、精神をよみがえらせることを目的としている。

権利の擁護者であり、リンカーンの熱烈な崇拝者であった。しかし、政治的策略が巧みで尊大なジョージ・B・マクレラン将軍に対しディキンソンが行った反逆罪の告発をリンカーンが支持しようとしなかったという理由から、彼女はリンカーンに反感を抱くようになった。リンカーンはさまざまなタイプの米国人の話に敬意を持って耳を傾けた。黒人の奴隷制廃止論者からクエーカー教徒の運動家、自らの内閣に登用した有能で精力的な個人、さらには自分の政敵の話まで聞いたが、重要な決断は常に自分自身で下していた。指導者としてのリンカーンは、その時々の政治的風向きを常に吟味しながら慎重に動いた。考えが変わることも多かった。著名な歴史学者であるジェームズ・ホートンの最新の造語を使えば、究極の「flip(フリップ)-(・)flopper(フロッパー)（立場をくるくる変える人、の意）」であった。だが、リンカーンの最も重要な本質をつかんでいたのは、偉大な社会科学者である W. E. B. デュボイスであったかもしれない。デュボイスはリンカーンを「一貫性に欠けるほど器が大きい」と表現した。

わたしがリンカーンに大きな魅力を感じる理由は、彼の人格の高潔さ、歴史家ジョン・ストーファが 19 世紀風のより広い意味で言うところの、リンカーンの「自分で自分をたたき上げる」精神である。リンカーンの思考は、平等に対する信念と自由の理想に深く根差しているため、われわれはリンカーンからあらゆることを想像することができる。彼ならば人種問題を解決できたかもしれない、女性参政権を拡大したかもしれない、と。そして誰よりも、リンカーンは米国にふさわしい英雄なのだ。

暗殺される直前の春のある晴れた日、エイブラハムと妻のメアリー・トッド・リンカーンは馬車で出掛けた。戦争は終わり、楽観主義が満ちていた。エイブラハムは将来を思い描いていた。大統領の任期を終えたら、欧州やそれよりさらに遠方にも旅行したいと、彼は妻に話した。その願いはかなえられなかった。しかしより広い意味では、エイブラハム・リンカーンは世界を旅したといえる。平凡な人間でも新たな自分をつくり出せるという彼の信念は、われわれすべてにとって十分な刺激になる。

アイリーン・マッケビッチは、エイブラハム・リンカーン生誕 200 年記念委員会の事務局長。シカゴ人文科学フェスティバルの共同創設者であり、1989 年から 2005 年までその実行委員長を務めた。またナショナル・パブリック・ラジオのシカゴ支局で放送ジャーナリストとして勤務したほか、イリノイ人文科学協会の副理事長でもあった。